

よしかゝる逆境に逢はないにしましても、之れからの世は、生存競争が日一日と烈しくなるのであり、ますから、女子が柔弱でありましたならば、決して其の競争に打ちかちて好い結果を納め、健全な家庭を作りて、其處に身心健全な子女を養育するといふ事は六ヶしいのでありますから、極幼少な頃から母親が充分な注意を以て、殊に女子には優にやさしい其の中に犯す事の出来ない剛徳を養ひ、おく事が肝要かと存じます。

要するに下流の女子の剛徳の缺乏は心の教育の不足にあるので、上流の女子の剛徳の缺乏は身體の鍛錬の足りない傾向があると存じます。無論上流の女子でも、心の修養は立派であるとは申されません、大要かく區別する事が出来ると思ひます。身心は密接な關係のあるもので、身體の影響は心に心の影響は身體に及ぶのでありますから、兩方をよく適當にねり上げなければ、完全な剛徳を備へた婦人とはなれないのであります。

中村敬宇先生の母

記 者

文學博士中村敬宇先生の名は西國立志篇の譯者としてのみ今の青年界に残つて居るけれども其眞摯にして温厚なりし德行に至りては夙に學者界に敬重せられて同人社なる先生の學塾の江戸川河畔に盛りし頃は一部の學生から神の如く尊敬仰慕せられたものであつた。今の女子高等師範學校も暫くは校長として先生を戴きしとがある。斯く一世の推重を受けし先生も明治の初年鎖港攘夷の説喧しく或は幕府の專横を憤るもの或は當局の優柔を慨するものなど續出して學者志士のそこ此處に刺客の手に斃るゝもの尠らざりし頃には危くも一ころであつた。然るに先生の母堂は従容として家人の狼狽を意とせず、當の刺客と押問答をして遂に之を説伏せて仕舞つた爲めに先生は幸に命を拾はれたさうである。當時の様子が先頃或新聞に出て居つたのを見ると其母堂の尋常一様の婦人で

なく其子に敬宇先生の出づる決して遇然でないことと云ふことが判る。左に記するは當時の模様の大體である。敢えて讀者の一讀を希望する。

維新の當時徳川幕府が先帝「孝明天皇」の英明を憚りて之を廢し奉つて今上を立てやうとして時の學者に廢帝の例を調べさせたとの風説が專であつた。而して其調査の命を承はつた不都合な學者は

塙二郎鈴木重胤と中村敬宇の三人であると云ふので、己れ國賊生かして置くなと云ふので塙二郎と鈴木重胤とは早速志士の手で掛つて忽ち黄泉の客となつたが、幸にも中村敬宇先生のみは誰も手を

下すものがない、そこで筑波義隊の志士薄井某と新徴組の豪もの小林某の二壯士が相計つて敬宇先生の家へと押掛けて行つた。先生は當時昌平橋

聖堂の役宅に住んで居られたので今の聖堂裏の古門の側であつた。

左に記すは當時の有様を薄井某が語つたまゝである。さて兩人は玄關に立て案内をする取次が出て來て來意を聞くから用向は御主人に面會の上で無くて

は申されぬ姓名も憚りあつて申上られぬと云ふとそれでは面會は出來ぬと云ふから開な事はお前の云ふ事ではない、兎に角主人に取次が宜しいと云付けると取次の者は澁々奥へ立ち行つた。自分等は直ぐ其跡に尾き踏込み今しも取次が居間の襖を開け只今玄關へ、と云ふか云はぬに後から取次の者を押退けて用向の者は拙者であると云ひざまづか／＼と中村の前に押坐つた其時中村は晩の食事中で侍女に給仕させて膳に就て居たが、侍女は此方の權幕に恐れて逃て行く中村も呆氣に取られて居る。

自分は直ぐに斬付けけるのは譯もないがそれでは氣が濟まぬ。詰るだけは詰つて其實を吐かせその上に手を下すも遅くはあるまいと「貴公は先頃幕命に依て廢帝の古例を調べたさうだが確と左様か何だ、己れ腐儒者性根を据て返答せよ」と刀を引着け居合腰で詰り問ふた、其時後の襖をすらくと開けて、座に入つて來た女性がある動するけしきもなく中村の傍に優かに坐つた。女性に坐に就つてや靜かに一禮して「妾は敬宇の母

でござります」と落着いた挨拶があつてさて云ふには「只今召仕の者が急遽しく驅けてまゐり尋常ならぬお客様があるとの知せに、失禮ながら襖の外から御來意は承りましてござります母の身として外にも開過されず失禮も顧みず御挨拶に出ましてござります御詰問の仔細はいかにも御概憤御尤ともではござりますが、其儀は母子の間柄でありまするに母の毫も存せぬ事根もない世間の風説かと心得まする忤に限りて其様な儀は毛頭ござりませぬ事は此母が證人に立ちます」と騒ぐげしきもなき辨解には自分も勢を挫かれたが強て聲を荒らげて、母が知らぬとてそれが無根の證據には相成らぬ其やうな秘密の取調べを母に告知する道理も無い筈邪魔な所へ出しや張ずと控えて居れとキメ付けると「貴下は世間の風説と現在の母の申上る儀と何れを信としてお取上になりませるか、先づ一通り此母の申解く事をお聴取遊ばして下さりますまいか」と平然として尋常の客に對談するやうな落付た物言、それを斥けて斬付ける事もならぬので「いかに一通りは聞いて取らせやう小林

中村を逃してはならぬぞ氣を付けてくれ」と一方中村を監視させ膝を進めて「サア申せ聞う」と迫ると「私の家は徳川のお祿を頂戴して居ります其お上の事を惡ざまに申すは實に心苦しい儀ではござりまするが我子の命には代られませぬ女の口よさり如何の申條でござりまするが腹藏ない所を申すれば近頃幕府の朝廷に對する御仕向は非道とも何とも申やうはござりませぬ何とも以て朝廷には恐多い儀と恐懼して居ります其非道な幕府が假に天皇を廢しまつるにしても何で廢帝の故例を調べさせるやうな迂遠い事を致しませぬやうぞ又假に其故例を調るとしても態々學者に命を下す迄もななく彼の北條氏が暴逆無道一時に四帝を遠流しまつりし承久のことは歴史の片端を窺ふた小兒でも知つて居る儀ではござりませぬかそのやうな例もあるに御讓位を迫る位は今の幕府の仕向としては容易い儀、それに何を苦しんで廢帝の例を調べさせるなぞの廻り遠い事を致しませぬやこれやを篤とお考へになれば世間の風説は根もない儀とお分りになりませう根拠も無い風説で人をお

斬なざる、貴下ではござりますまいと失禮ながら存じます。殊に悴は幼なきより孔孟の道を學び大義明分は辨へて居ります苟にも朝廷に對して不忠不義を働くやうな嫉は此母が致さぬ筈サア斯程に申し解きましたも御疑念が晴れず尙悴をば手に掛けやうとならば何と致し方がござりませぬ不運とあきらめてお留は申しませぬが老先短い老母一人生存へるも詮ない事母子共々潔くお手に掛て果まするでござりませう」と實に理義明白に説かれて見れば成程一々尤である殊に我子を庇ひて身を投げ出した老母の眞情と其雄々しさには心密かに感じた。もう手の下しやうも無い然し刀の手前只引歸る譯にも行かぬ、いかにも其方の云ふ所は一應は聞えた然らば今日は此儘引取るが若外を調べて其事實があつたとすれば重ねて首を申受にまゐるぞ先づそれ迄は其首は確と預てまゐるぞ」と棄臺詞を残して引取つた。踏込で斬れば譯もなく殺せたのである中村は實に命冥加の人でそれにして其母は豪い女傑である。

雜 錄

● 朝鮮の家庭

▲門が幾箇もある 近所に朝鮮の貴族があつてその貴族の夫人が日本婦人が珍らしいから一度逢ひたい來て下されとやかましく云つて來る、下女に韓語を使ふものがあつたのでそのお邸へ行つたことがある、行つて見ると門が幾箇もあるのには驚いた、大門を入ると下男下女の部屋が門内に並んでゐる、一度下女なり下男になつたら終世浮ぶことはないそれだから總體下男下女夫婦で暮らしてゐる、そこを過ぎると又門がある、この門を入ると家來衆の部屋があつて又門である、この門を入ると正面に應接間がある、その邸の中央の華美な裝飾の室に主人が頑張つてゐる、この主人の室の四方は廣い板の間でこゝにまたゴロ／＼門に座がある。こんな有様だから夫人の居間へ行くにはもうへな／＼になる、夫人の居間はこゝの邸内にある